

山と博物館

第35巻 第3号 1990年3月25日

大町山岳博物館



シャモア（いちばん上がオス。% 撮影 宮野典夫）

シャモアがやってきた

大町市とオーストリアのインスブルック市、大町山岳博物館とアルプス動物園との友好提携五周年を記念して、シャモア（アルプスカモシカ）がアルプス動物園から山岳博物館へ贈呈されました。今回やってきたシャモアは、昨年春アルプス動物園で生まれたオス一頭とメス二頭です。まだどことなくあどけなさの残る顔だちと小柄な姿に、かわいらしさが感じられます。

三頭のシャモアは平成二年一月三十一日、新東京国際空港に到着し、成田での三十五日間という長い検疫の後、三月八日に山岳博物館へ到着しました。この日、アルプス動物園のアロイス・ルツガー会長の手で運搬箱から広いシャモア舎へ放たれると、軽い足どりで急な斜面を一気に駆け登りました。翌日の歓迎式の後、一般公開されました。

ニホンカモシカとアルプスマーモットの動物交換が機縁となった両市、両園館の友好はより親密の度を深め、いろいろな交流がされてきました。アルプス動物園からはマーモットにつづいてオオライチョウが贈られ、平成元年には自然繁殖で初の雛が誕生し、動物使節としての大役を果たしました。そして今回シャモアが加わり、本場ヨーロッパアルプスを代表する動物たち三種類を山岳博物館付属園で見学できるようにになりました。いずれも国内では飼育例が少ない動物ばかりです。

シャモアの受け入れ準備中に、アルプス動物園から頭数変更の通知が届きました。メス一頭の予定を二頭にしたいとのこと。これは大町に来たシャモアの繁殖率が少しでも高くなるように、とのアルプス動物園の願いからです。このご好意にそうよう、一日も早く山岳博物館の施設と大町の気候に慣れて、元気に育ってほしいと願っています。今はまだ幼ないシャモアも二年後には繁殖が可能とのことです。二世の誕生を大いに期待しています。

（大町山岳博物館）

北アルプス南部の石室

穂 苺 貞 雄

近代登山のはじめ

近代登山がはじまった頃の登山は、今では想像もできないほど苦勞の多いものであった。登山道・山小屋などなく、完全な地図・案内書もなく、山自体の位置・名称さえはつきりしていない時代であったから、登山そのものがまさに探険といっても過言ではなかった。

明治三十八年、日本山岳会の誕生と前後して、若い登山者は競って中部山岳の高山へと進出した。そして明治末から大正初めにかけて登山熱は一段と高まり、日本アルプス探険登山はその黄金期を迎えるのである。

当時の登山者は、その附近の山に詳しい地元の人や、樫などを利用していた。樫を組み合わせ造る粗末な掘り立て小屋が、樫師や藁草取りが利用していた岩室を使っていた。また何も無い場所では、ハイ松の中にもぐり込むなどして寒気を防いだのである。

山中の岩室

岩室は約八百年前に既に富士山の八合目付近に、また立山の室堂にも二百年前に建設されていたといわれる。北アルプス南部でも乗鞍岳に明治初めに建設されているが、その他各地に自然の岩室もあり、探険時代の登山者によく利用されていた。古くは槍ヶ岳開山の播磨上人が利用したので坊主の岩小屋といわれるものをはじめ、殺生・赤沢・瀧沢・横尾などの岩室はよく知られている。また飛騨の笠ヶ岳にもいくつかの岩室がある。

二の俣の石室

特に二の俣小屋といわれた石室は、槍をめぐらす昔の登山者によく利用されていたのである。大天井岳から常念岳に向かう時、東天井

の手前の登山道の右側、二重山稜の窪地に石室が二個ならんでいる。喜作新道がまだできない時代は、中房から槍ヶ岳へ行く登山者は、大天井岳を越え東天井附近から二俣を下り中山の鞍部を越えて梓川本流に出て槍沢を登ったので、道中二の俣の石室をよく利用していた。私がこの石室の存在を知ったのは大分昔のことであるが、常念寄りの石室の中にある白い花崗岩の石柱には大きき関心を抱いていた。この石柱は二つに折れているが、次の文字がかるうじて読めるのである。

「本会ノ石室建設ノ企ニ賛シ豊科町丸山盛一氏ハコノ建設費全部ヲ寄付セラル

大正六年十月十五日 南安教育会

またこれと全く同じ文字が刻まれた黒い石柱が槍沢のテント場の石垣に立てかけてあることも、私は昔から知っている。これは二の俣にある石柱のものより大きく、しかも文字が深く刻まれているのはっきりと読めるのである。槍沢の現在のテント場には大正



大正六年建設の二の俣の石室

白い花崗岩の石柱が立てかけてある。
(丸山盛一の寄附で建設された。)



槍沢のテント場にある石柱

(長さ80cm、周囲50cm)

六年創設の槍沢小屋があったが、火災に遭ったり雪崩で壊されたので、現在は下方の森林帯に移されている。石室の所在については昔槍沢小屋で働いた人達に尋ねたが、ある人は小屋増築の時石室を壊してしまったのではないかといい、どうもはっきりしないのである。

またある時、私は写真撮影に出かけて坊主の岩小屋の北東わずか二十メートルのところ二の俣の石室と全く同じ造りの石室を見つけた。これは大きな岩がごろがっている中にあり登山道からはよく見えないので、長い間気がつかなかったのである。この石室についても、いつ誰が造ったかを知る人はいない。

南安教育会が槍沢に造った石室とはこれを指すのか、あるいはここにあった前述の石柱を誰かが槍沢テント場へ背負い下ろしたのではないかと疑問を抱き、更に昔歩荷をやった人達にも尋ねたが真相はわからずじまいであった。私は年に何回となく槍沢テント場の石室を眺めるので、そのたびに槍沢テント場の往復する時、二の俣の石室のことを気にかけていた。また一昨年初、槍から常念へ縦走し久しぶりで二の俣の二つの石室に再会し、私は非常に興奮を覚えたのである。それ以来各方面に調査の範囲を広げ、二の俣の二つの石室は同じ時に造ったものか、槍沢の石室はどこにあったか、その建設費全額を寄付した奇特

な人、丸山盛一とはどういう人かなど鋭意調べることにしたのである。しかしその調査はなかなかはかどらなかつた。

長野県十ヶ所の石室を建設

ところが偶然のことからこれらの疑問が解けてきたのである。ある日、父の遺した蔵書の中から日本山岳会の古い会報を取り出して読んでみるうちに、大正八年六月十日附の信濃毎日新聞の記事として長野県が県内の山岳地に十ヶ所の石室建設の位置を決定したとの報告を見つけた。それによると……

「本県に於て臨時県会の決議を経て、今回新に築城せんとする高山の山室の位置は十ヶ

處を

一、白馬(頂上より下り八丁在来の位置)

二、鐘ヶ岳(頂上より下り一里岳の湯)

三、大黒岳(八方降路)

四、二ノ俣(中房より槍ヶ岳への通路)

五、槍ヶ岳(坊主の小屋附近)

六、乗鞍岳(頂上附近)

七、赤石岳(大小路より東下り十町)

八、東駒ヶ岳(頂上より西に下る十丁)

九、岩菅山(頂上附近)

十、ハツ岳(赤岳頂上の北側)

と決定し九日学務課より山の処在町村若くは教育会特志団体に對し特選受負の形式に依りて助力せられこと……とあり、更に

「内面、大は四間に二間四尺、小は三間に二間四尺にて四面石積となし屋根其間隙はセメントを填充し屋根は木造にて厚さ一寸板等とし、クレオソートを塗布し別に便所をも附設する計画……とある。

このうち鐘ヶ岳のものは後に祖父岳冷池に変更されたが、(四)にある通り二ノ俣・坊主の小屋附近にはこの時石室が建設されたのである。現在は何れも屋根は朽ち果ててなく、セメントが詰められた石垣も所々が壊れているが、間口四・八、奥行七・〇メートルで、



坊主の岩小屋附近の石室

大正8年 長野県で建設

大きい石室の部に入る。そして二つの石室の建設は乗鞍のものを含めて南安教育会が請負い、それぞれ業者に委託した。二の俣の石室の建設は燕山荘創始者の赤沼千尋氏があたったという。（赤沼淳夫氏談）

以上述べた通り、坊主の小屋附近の石室は大正八年の建設であるので、槍沢の大正六年建設の石室は別の場所にあるはずである。また二の俣の石室の一つは大正六年、もう一つは大正八年、何れも南安教育会により建設されたことがわかったが、それ以前にも二の俣小屋を利用した登山者の記録がいくつもあるのである。これはどうしたことか。

狐師の使用した石室

小島鳥水の「山谷放浪記」によれば、明治三十九年の登山の時、「偃松の間に、石壁があつてその石壁で風をよめるように、うしろに乱石を積み上げ、樺の皮で屋根を葺いて藁舎なるものができている」とあり、また山岳第三年第三号（明治四十一年十月二十五日発行）の河田黙の日本アルプス中央部横断の旅行談には、「二の俣小屋は」此の附近に於ける唯一の泊り得る小屋ではあるが、周囲の石壁大部損じ屋根は破れて殆んど其の用をなさぬ・・・とあり、更に山岳第八年第三号の「高山岳会団体旅行概況」によれば、大正二年当時、「当小屋（二ノ俣小屋）及燕

小舎は今年新に屋根を設けたり」とある。

またウェストンは大正三年八月、中房温泉から燕・大天井・二俣・上高地へ縦走した時、途中二の俣小屋に一泊して「八月二十一日午前四・四五起床、荘厳な朝、空には雲もなく、槍と北の稜線から南西へ見事な眺め、足もとはずこい対照、この小屋への以前の来訪者の不潔で散らかつたお土産で。日本の二流人はなぜいつも散らかし家をひどくするの（三井嘉雄氏談）」と、その日記に二の俣小屋が登山者によごされていることを書いている。こうして二の俣小屋は明治年代から既にうたがひがある。しかも父三寿雄の「山想雑記」によれば、いつからあつたかわからないが、昔からあつた狐師小屋を陸測部員により手が加えられたものではないかと言ふ。大正八年に父が狐師の小林喜作を案内人として槍沢から赤沢と西岳の鞍部に登り、筆嶺（今の赤岩岳）を越えて大天井へ出た時、喜作がこの筆嶺附近の草付に熊・カモシカがよく出没するので、二の俣小屋から通つたものだと言つたと言ふ。このことから、はじめは狐師小屋であつたと思われるのである。

槍沢の石室

ところで大正六年に建設された槍沢の石室はどこにあつたのだろうか。この点も「山岳」に明確に記載されていた。大正七年一月発行の山岳第十二号第一号の雑録には、「槍ヶ岳下の大旅館」の題名で次の一文がある。

「・・・夫れは槍ヶ岳の下赤沢小屋岩の上、馬場の平に来るシーズンには常に四十人成は夫以上の客を泊せしむるに足る普通の木造旅館一軒と尚同地点に更に一個の石室が出来る事に御座候、目下旅館の方は十数人の大工、石室の方は八九の土工を入れて何れも二の俣に於て木組其他夫々準備中・石室は南安堂郡教育会の建設する処、馬場之平に到り見候に下より登る時は河原に出る半町手前右側小林中に既に地を開きあり・・・」

大正六年十月廿一日 森 剛馬

私はこれまで石柱のあつたテント場附近を中心に探していたが、この記事からもう少し下方の森林帯に石室があることがわかった。本年、この附近の雪の溶ける五月末には現地調査して、長年の懸念であつた石室が果してどんな姿になつて残っているか、この目で確かめることを今から心待ちにしている。

前常念の石室

北アルプス南部に於ては、この他各地に初期の登山者を利用された石室があり、あるものは壊れてなくなつたが、現在も引き続き利用されているものもある。その代表が前常念の石室である。

この石室は飯山市出身の佐藤嘉市の熱意により建設された。大正五年堀金小学校長として赴任した佐藤嘉市は、常念岳の秀麗な山容に魅せられ、常に生徒達に「常念を見よ」と常念岳を讃え、あの姿の如く清く美しく生きるよう教えていたので、常念校長と呼ばれるようになった。自ら常念山人と名のり、彼には常念窟という額をかけていたという。彼は堀金小学校を中心として大正七年六月、常念岳研究会を結成し、登山道の開拓・指導標の樹立と共に、前常念の山頂附近に石室の建設を企て、村内から協賛金を集めた。そして大正八年工事費金四百円で、広さ間口二間半、奥行一間半、石室の周囲は一方が天然の石積みの壁、上はたる木、屋根はトタン葺き、中央に土間があつて自在鍵をつるしてある石室を完成させたのである。

そしてその直後には堀金小学校、村民など四十人の集団登山を行い、後には県内外の各地からも大勢の登山者があつたという。暫くの間堀金小学校を中心に登山道・石室の手入れをしていたが、昭和十五年、六年頃の台風で屋根が壊され、ついには倒壊してしまつた。昭和二十年代には基礎の石積の型だけが残り、昭和四十四年六月、堀金村の山の会による再建の話が発端となり、

会員の血と汗により工事費金三十万円で再建されたのである。現在の規模は間口五・一、奥行二・七メートル、高さ三・〇六メートルの立派な石室である。今も登山者の避難小屋として利用されているが、歴史の証言者として長く存続することを心から願うものである。

南安教育会の活動

登山の気風が盛んになると、教育界も北アルプスにその関心を向けるようになった。明治二十一年、信濃教育会の支会として発足した南安教育会には、郡下の北アルプスの地質・動植物調査を積極的に行うようになった。地質調査は大正五年から大正十五年まで、動植物調査は大正七年から大正十年にわたつて行われたが、登山道・小屋などが未整備であつたので、調査は難渋したという。そこで南安教育会では前述した二の俣・槍沢の石室を建設したのである。このことについて「山岳」第十三年には、中房温泉の百瀬彦一郎が次のような報告をよせている。

「（アルプス巡回路は）中房から燕岳、大天井岳、常念、二ノ股、槍沢等を経て上高地に到る所謂常念山脈の縦走路です。山中の小屋は登山者のために天国であるが、此業しい小屋の開祖は信濃教育会、南安堂郡会などの団体で即ち前記の常念山脈中、二の股、槍の二峰に営まれつつある。此二箇所的小屋は極めて完全なもので、其の營造費も可成りの額に達してゐるが、是には篤志家があるのです。その篤志家といふのは神戸の紳商である丸山盛一氏（南安堂郡豊科町出身）のことです。氏は世間の成金と一寸毛色の一切を寄附したのです・・・」

建築費の大部分を寄附したのです・・・」

更に二の俣は中房温泉が、槍沢は上高地温泉がそれぞれ管理することになり、特に二の俣については中房温泉が米・味噌・食器などを常備して公徳販売法を採り、登山者の自由使用に任せることにしたと報告している。

篤志家 丸山盛一

丸山盛一については本当に長い間尋ねあぐねていたが、最近ようやくわかってきた。

私は昨年山岳写真家田淵行男記念館の建設をすすめる会の発起人の一人として豊科町の委員会に度々出席したが、ある時余談として丸山盛一に触れたところ、彼のことは「広報とよしな」に掲載したことがあると教えられた。それによると「取り壊される現在の武道館」として武道館の写真をのせ、「現在の武道館は木造平屋建て瓦葺、五三六・三平方メートルで大正八年九月に建設 郡公会堂として当町本村出身の丸山盛一氏の寄附で建設され、大正十一年郡役所廃止により町公会堂となり、昭和二年九月町公民館となる。昭和四〇年十月南安自治会館新築に伴い現在地に曳引移転して昭和四二年十一月から町武道館として利用してきた」と説明してあった。

更に大正十二年発行の南安豊郡誌によれば「本館は間口八間奥行十二間、木造平屋建にて 貴賓室其他の附属建物を合せて建築費総計一萬二千九百二十二円を要せり、これ等すべて豊科町出身神戸市在住丸山盛一氏の特志寄附に俟つものあり」とあり、現在の金額に換算すれば何億の大金を寄附しているのである。

一方南安教育会の石室に寄附した金額は、南安豊教育会百年誌によれば当時の金額で四百円である。こうした事業に深い理解のある丸山盛一は、ただ単なる実業家ではないはずであるが、その後については全く不明であった。ところがこのたび豊科町役場を通じてその親族を知ることとなり、概要が判明した。盛一は明治七年、豊科町本村に丸山七郎・むつ夫妻の四男一女の長男として出生した。当時の丸山家は現在の南豊科駅の西側一帯に広大な農地を持つ豪農で、本棟造りの住宅の周囲が堀で囲まれていたので、屋号を「内堀」あるいは「堀の丸山」または「山七」と言った。若い頃上京して慶応義塾で学び、明治二十八年、二十一歳の時結婚して一女をもうけ

たが夫婦生活はうまくいかず、妻子を豊科に残して上京した。その後神戸に移り、小さな海運業をはじめたという。

商売は順調に伸び、業務を拡大して五興商會という会社組織にした。主に中国との貿易で、その取扱品は雑貨が中心であったが、木材にも手を広げ、四国で伐採したものを関西、関東へ運んだりもした。欧州大戦がはじまると海運業は急速に発展したそうである。前述の大金を寄附したのはこの頃であった。

事業は順調であったが、家庭生活で破綻をきたした妻とは大正十四年に協議離婚、翌十五年には神戸の女性と再婚している。盛一は身長が五尺五寸(約一メートル七十)くらい。小ぶりの色白の好男子。酒をこよなく愛し、豪放磊落、しかも金放れがよかつたので花柳界の女性には大変にもてたことである。

そのためか愛妾が五人、その間に子供が十六人も生まれている。しかし絶頂期はそう長くは続かなかつた。

昭和二年からはじまった世界大恐慌により大打撃を受けて倒産。裸同然になってしまった。そこで盛一が昔いろいろと面倒をみた弟が東京で実業家として成功していたので、彼を頼って上京、その援助を受けることになった。しかし多人数の家族を抱え何もせず、ただ弟の庇護に頼つてばかりにはいかない。まず麴町のビルの片隅を借りて「浮世」という店名でしるこ屋をはじめたそうである。やがて弟の口ききで丸ノ内の三菱ビルの事務所などへすしの出前をするなどして、何とかその商売も軌道に乗り人手が必要となった。そこで豊科町の盛一の生家に離婚後も住んでいる先妻に孫のいることを思い出したのである。



丸山盛一像

先妻には盛一との間に一人娘があり、彼女に養子を迎えその間に四人の子供がいたのだが、養子は事情があつて出奔して行方不明になっていた。豊科には盛一の残した広大な農地があり、年貢が入つたので何とか生活はできたが、盛一の事業が倒産してからは農地が売られ、その生活も困窮していた。昭和七年孫の龍子が十五歳の時、盛一に呼ばれて上京した。このたび私はこの龍子から直接詳しいことを聞くことができたのである。

龍子の東京での生活は、何かと派手な都会の大人達の中にあつていつも肩身の狭い思いをし、しかも召使同然の扱いを受けて大変に苦労したという。しかし盛一は人前ではよそよく振舞つていたが、陰ではやさしい言葉をかけてたりして、何かと面倒をみてくれる情愛の深い祖父であつたと龍子は述懐する。

また盛一について、祖母とは離婚し自分達の家族を苦しめた人ではあつたが、今は恨みに思うどころか、非情な運命に翻弄され気の毒に思うと語つていた。龍子は「浮世」で三年間手伝いをして豊科へ帰つたが、それ以来祖父とは会つていないと言ふ。

盛一は百萬長者から一変して、しるこ屋、すし屋に転落したとはいへ、一家の生計をたてるために多忙な時は龍子と共にまだ暗いうちに起きて出前用のすしの包装をするなど一生懸命に働いていた。しかし妻以外に何人かの愛妾がいて家庭が複雑であつたから常にいざこざが起き、対応に頭を痛めていたようである。老年になるとその人達も次々に去り、病の床に臥す頃は尼ヶ崎で旅館をやらせていた一番若い女性が盛一の面倒をみて、最期も見とつたと風の便りに龍子は聞いたという。

昭和十四年十一月二十二日死去。享年六十六歳。死因は直腸ガンであつた。東京で簡単な葬儀が行われ、遺骨は神戸の寺に埋葬されたが、第二次世界大戦で墓地は二回も空襲を受けて焼失し、現在の墓の所在すら確認できないとのことである。

盛一の生涯は太く、華々しく、まさに波瀾万丈である。それは人生の無常を物語つて哀れでもある。彼はその人生の最盛期に郡公会堂を、また南安教育会のために北アルプスの石室の建設費を寄附するなど、ただ単なる実業家ではなかつた。世のため人のために大きな貢献をされたのである。

だが今やその建物は壊されてなく、石室も壊れて全く使用されず、その横を通過する登山者はその存在さえ気がつかない人がほとんどである。古い時代のことを語り継ぐ人がなくなり、すべてが闇の中に忘れ去られることは何としてもしびがたい。北アルプスの歴史の一駒として、この小文を記した次第である。(文中敬称を略させて頂きました)

参考文献

- 日本山岳会会報「山岳」
- 『日本登山史』 山崎安治著
- 『南安豊教育会百年誌』
- 『南安豊郡誌』

特に三井嘉雄氏には文献の所在を、豊科町役場には丸山家のことを、堀金村教育委員会には前常念の石室のことを種々ご教示頂きました。記して心から感謝申し上げます。(植岳山荘・植沢ロッヂ経営)

山と博物館第35巻第3号

発行所 長野県大町市 TEL026-221-1111
印刷所 大町山岳博物館
大系タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一)二二一九二